

歴史としての紀伊半島

——純文学、あるいは中上健次のために——

1. 大いなる共和国的存在

信長の場合（紀伊半島の二つの付け根）

東：長島一向一揆……伊勢長島（尾張河内）で一向門徒と三次にわたる戦闘。

信長の庶兄信広、弟信興・秀成、一族の小瀬清長、織田信次、織田信直、織田信成、織田信昌、信長の義弟佐治信方（妻は信長の妹）、佐々松千代丸（成政の嫡男）、氏家卜全、林通政、平手久秀らが戦死し、一方の門徒側は女子供を含めて2万人が焼き殺されるなど（『信長記』、『年代記抄節』）、虐殺が発生。

西：石山合戦…………1570年～1580年まで、十年にわたる戦い。

本願寺攻め不手際により高野山に追放された重臣、佐久間信盛の遺物を提供しなかったことなどを理由に、1581年8月、信長は諸国の高野聖を捕縛、安土城外、伊勢蜘蛛河原、京都七条河原にて、高野僧、宿仮聖（やどかりひじり）1,383人を斬殺（『多聞院日記』ほか）。

- 信長にとって、紀伊半島の輪郭はいつまでも不明瞭なまま。海と山の間から、不穏な者どもがこの権力者の外皮を侵すように染み込んでいた。
- 信長を主にみれば、虐殺は彼自身の人格的苛烈に原因。門徒を主にみれば、むしろ信長が虐殺以外に道を失っていく、つまり勝利と引き換えに人心を失い、門徒に翻弄される哀れな姿。
- たしかに、織田氏は畿内のほとんどを制圧したかに見えるが、それは「領土」なる概念に囚われているかぎりのこと。現実の畿内には、「領土」の概念をものともしない、門徒をはじめ、神仏に近しい変幻自在の存在がいたるところに蠢いていた。
- やはり自身になかなか従わなかった高野山出陣直前、明智光秀の謀反により横死。

秀吉の場合（神の国）

徳川家康との決戦に集中できず。秀吉の本拠、大坂のすぐそば和泉まで一向門徒が押し寄せていましたから。

家康との戦い（8ヶ月）の大半を秀次に任せ、本人は紀州責めに時間（4ヶ月）を費やす。

- 家康と戦っているさなかに伊勢遷宮復活。延暦寺復興。長谷寺復興。
- 怨敵信長を調伏する祈祷をおこなった高野山の木喰と手を組み、紀州・熊野の制圧に成功。
- その総仕上げが東山大仏・大仏殿の建立。神国思想に到達。
- 秀吉の目標は、信長が踏み入れられなかった死者の世界。世俗の世界は二の次。秀吉にとって、天下分け目は小牧長久手ではなく、紀伊半島。

家康の場合（分断）

紀伊半島を挟み込むように、徳川宗家につぐ御三家のうちの二家、尾張・和歌山（水戸は開府当初は二家の下）を配置。そのあいだに、桑名藩（本多忠勝、のちに松平定勝）、大和高取藩（植村家政）を配置。

→ 京と紀伊半島とを分断し、後者を太平洋の彼方に遠ざけるようにしている。

→ 幕末は京都方広寺を出発点に、大和に下向した天誅組が高取城を襲撃。

ルイス・フロイス

「大いなる共和国的存在」。『日本史』

2. 半島とアメリカ——中上健次の想像力

戦後最大の作家、中上健次

「紀州もすごいかもしだれんが、日本海だって波が荒いんだぜ、ここは入江になってるから感じが違うけど」

湾の右手に雪が光る山がみえた。

「朝鮮半島が見えるかもしだれんな」

富山の仲間はわらった。海の向うにアメリカがあると思って育った人間と、朝鮮、中国があると思って育った人間とではどう違ってしまうだろうかと思ったのだった。眼をこらして見ていると水平線の向うに朝鮮半島がぽっかり顔を出す気がした。

「風景の貌」

→ 富山湾の彼方に朝鮮半島をみる想像力と、太平洋の彼方にアメリカをみる想像力のちがい。

→ 大東亜戦争とは？

国民国家の物語

中上健次は「母方で言えば三男、父方で長男、戸籍上で長男、育った家庭では次男」。「路地」に育つ。

『枯木灘』……主人公竹村秋幸と実父浜村龍造の私小説的物語。

その男龍造蠅の王が、秋幸の実父だった。その蠅の王の周りにはいつも、噂が立ちのぼっていた。大きな男だった。どこの馬の骨やら、と人は言った。或る時、こんな噂が流れた。熊野の有馬の土地に、浜村家先祖代々の碑をたて、元をただせば馬の骨などではさらさらなく、戦国の時代、織田信長の軍に破れた浜村孫一という武将が先祖である、と言いはじめた。人の失笑を買っていた。「金があれば御先祖様までええのんと取り換えるんかいの」人は言った。「そんなことまでして、町の人の仲間入りをしたいんかいよ」一度その碑を見てやろうと秋幸は思っていた。

秋幸の母フサは、その男のことを多くは語りたがらなかった。秋幸もまた聞きたくもなかった。親が誰であれ、どこの馬の骨であれ、それが二十六歳になった自分に何のかかわりがあるのか、と思った。「先祖がそれでどうしたんじゅ」と秋幸はわらった。

→ 秋幸=幸徳秋水？

Cf. 柄谷行人「可能なる人文学」

僕は『近代文学の終り』という本を出した……こういう「終わり」は、突き詰めると、やはり「差異の消滅」ということにあると思います。差異とは、具体的にいえば、階級的差異、男女の差異、年齢（世代）の差異ですね。これが無くなると、パワーが無くなる。芸能や文学の栄光は、差別的な社会構造に基づいています。……小説でいえば、中上健次ですね。彼は桁外れのすごい作家でした。それは、彼がたんに知的に現代文学の先端を行っていたからではなく、彼の力の根源に、巨大な差異、つまり、差別の問題があったからだと思うのです。しかし、この差異は八〇年代になって、急激に衰えた。……もし差別が真に無くなるのなら、文学など無くともいい。

- 日本の国民国家形成を担ったのは、戦前日本の純文学という特異な「制度」。
- 純文学はナショナリズムを生み出す？

中上健次「戦争を欲する子供たち」

文学は、戦争を欲している、と気づく事がある。敗戦後、三十三年経った今、現在である。かつて領土の拡張、利益衝突や経済の要求のため、戦争は渴望されたが、文学が自らの活性化の為戦争を欲している、と思う。……

戦争とは奇妙な物である。戦争に幾つかの種類がある。独立戦争、国家利益の衝突による戦争、侵略戦争、革命やクーデターをも戦争と呼んでよい。戦後三十三年目になって、新世代の小説家らの無自覚の作品が、どの種類の戦争か分からぬが、巫女が招魂をするように戦争というある熱のかたまりを手招きしはじめているのである。

- 文学は国家よりも、戦争に似ている。

3. 愚者の文学——大石誠之助

反逆者の自然（大逆事件）

アナキストの主張する直接行動とは？（幸徳秋水「獄中から三弁護人宛の陳弁書」）

即ち私共が革命というのは、甲の主権者が乙の主権者に代るとか、丙の優良な個人若くば党派が、丁の個人若くば党派に代って、政権を握るというのではなく、旧来の制度組織が朽廢衰弊の極、崩壊し去って、新たな社会組織が起り来るの作用をいうので、社会進化の過程の大段落を表示する言葉です、故に厳正な意味に於ては、革命は自然に起り来る者で、一個人や一党派で起し得る者ではありません。

- 革命は自然に生じるが、運動は必要。

人間が活物、社会が活物で常に変動進歩して已まざる以上は、万古不易の制度組織はあるべき筈はない、必ずや時と共に進歩改新せられねばならぬ、其進歩改新の小段落が改良或は改革で、大段落が革命と名けられるので、我々は此社会の枯死衰亡を防ぐ為めには常に新主義新思想を鼓吹すること、即ち革命運動の必要があると信ずるので。

- 革命運動とは、「新主義新思想を鼓吹すること」。革命は言語上の問題。

Cf. 佐藤春夫「詩文半世紀」

当時、一般には〔文学上の〕自然主義と社会主義とをほとんど同じもののように誤解していた。

- 文学=社会運動。言葉と現実の世界の奇妙な一致。

言葉と自然（大石誠之助）

中上健次「私の中の日本人」(*健次の義理の祖母の話)

大石ドクトルの拘引、処刑は、町の人間に大きな衝撃だった。その当時の町の人間にとっては、大逆などという事はあってはならない事だった。マルクス主義も、無政府主義も、分からぬ。大それた事をした人がお上の手で引っぱられて行った。その人は、医療費を払えぬ貧乏人に、言葉にして「金がない」と言うには羞かしいだろうから、硝子窓を三回トントンと叩いて合図しろ、と教え、そうすればただで貧乏人を診察した人だった。

私が、大逆事件の、大石誠之助を、歴史の人間でなく生きた血の通った人間として思い描けるのは、そのトントンと硝子窓を叩くエピソードによる。義父の母親、私から言えば義理の祖母が、そうやって硝子窓を叩いて、診察してもらった。

大石誠之助の弁護（「社会主義と無政府主義について」）

私は社会主義や無政府主義に対し、理想と実行とを全く別々に離して考えて居りました。従ってこれを鼓吹するに置いても、公開の談話会や演説で述べたり、新聞雑誌へ寄書した外に、かつて実行の方面に手をつけたことはありません。そしてその主張というものは、遠き遠き将来に起るべき、取り止めもつかぬような理想——寧ろ空想——であって、今日では自分的一身一家についても決して実行のできることではないのです。

→ 絞首台での最期の言葉。「嘘より出でし真実なり」。

佐藤春夫「愚者の死」

千九百十一年一月二十三日

大石誠之助は殺されたり。

げに厳肅なる多数者の規約を

裏切る者は殺さるべきかな。

死を賭して遊戯を思ひ、

民俗の歴史を知らず、

日本人ならざる者

愚なる者は殺されたり。

うそ まこと
「偽より出でし真実なり」と

絞首台上の一語その愚を極む。

われの郷里は紀州新宮。

かれ
渠の郷里もわれの町。

聞く、渠が郷里にして、わが郷里なる

紀州新宮の町は恐懼せりと。
うべさかしかる商人の町は嘆かん、
——町民は慎めよ。
教師らは国の歴史を更にまた説けよ。

4. 自由の文学——西村伊作

半島に集まる自由主義者たち

アブラハムの子イサクにちなんで名付けられた西村伊作は、大石誠之助の兄、余平の子。1891年の濃尾地震の際、余平は妻のふゆとともに、美普教会の煙突の下敷きになって死んだ。伊作は母方の西村家（奈良県下北山村の山林王）にひきとられ、跡継ぎの途絶えた家の当主となって莫大な財産を得た。大逆事件の報はアメリカで聞いた。叔父の刑死に精神的よりどころを失った自分もまた、社会主義者として当局から睨まれていることを知った。だが彼の、日本人の生活改良の熱意はつづいた。

- 西村芸術生活所や文化学院を設立。
- 文学者と社会運動家が紀州に集結。複雑にからみあう。
- 依然として半島は「大いなる共和国的存在」（フロイス）。

自由思想家

佐藤春夫「わが伊作さん」

この人はまことに楽しく上手に語る人で、特にその身の上話が面白いが、広島の中学校で制服というバカゲたものにあいそをつかしアメリカへ渡って勉強することを思い立って、アメリカへ行ったら、アメリカ人が「お前は何者か、クリスチャンか、ナショナリストかソシアリストか」などと問うから一語「自由思想家さ（オンリー・フリー・シンカー）」と答えてやったというが、この一語こそ彼の自画像の最も簡略に正確な素描であろう。何らの権威にも煩わされず思う存分、我儘勝手にそうして長生きをしたのがわが伊作さんである。

- I am only a freethinker——。賢者はいうだろう、神 キリスト も、ネーション 国家 も、ソサイエティ 社会 もなしに、言葉が可能だというのか？ アメリカ人の疑惑は欠伸が出るほど正当だ。すなわち伊作もまた、愚者である。

5. 半島の神

風景を超えて

中上健次「私の中の日本人」

文化学院の創立者である西村伊作は、このように書いている。「彼は元来、宗教を全然信じなかった。宗教というものは軽べつするような点もあったが、自分が拘留されて死刑に処せられるということがわかったときに、彼は自分とイエス＝キリストを比較して見て、自分もキリストのような運命を持つのだと思ったらしい」理不尽な死に際して、獄中で聖書を読みながらなお宗教を信じない大石が、では何を信じていたのだろう。私はその大石に興味がある。

同「美しさを超えて映る半島」『夢の力』

半島ではほどほど、中庸がない。なにもかもむき出しである。貧困は貧困のまま、日本的自然の帰結である差別は差別のまま、被差別は被差別のまま。半島を車で走り、風景を眼にする私には、美しさそのものもむき出しに映る。その杉木立が日に当っている風景、渓流の水が岩にしぶきを上げ、紅葉の始まった樹木がある風景がちょっとならまだよい。どこを見ても、どこを切り取って額に入れても美しい絵になる美しい風景は、私の眼には美しさを超えて別の物に映るのである。

風景は風景という枠組を越え、自然は自然という枠組を越え、宗教のようなとしか言いようのない感情を人の心にもたらす。その事物の氾濫美しさの氾濫を統べる物は何もない。輪郭が溶け、岩の内実、日に当る草々の内実が入り混じったように見える風景は、ここでは日の当って輝いただけの闇だとしか言いようがない。あめつち天地が分かっていいらことのはい書き言葉、すめらぎ詞によって治めた天皇の都が、けっして紀伊半島の中ではなく、大和・京都だったことが理解できる。

ものを見る人間に、半島は本質として無政府である。

- 半島は国民国家の臨界。
- 半島は、海と山のあいだにあって、なれば国家であり、なれば海である。地球上を国民國家が埋め尽くしたかにみえる近代にあって、島でも本土でもない半島は数少ない外部。

紀伊半島の偉大さ

- なぜ、上皇の一族は異常な熱意でもって、熊野を求めたのか？
- なぜ、秀吉は俗世で最強を決する家康との戦いよりも、紀州を優先させたのか？
- 玉座の天皇を否定したとて宗教的なものがなくなるわけではないし、また宗教を否定したとて、イエス＝キリストがいなくなるわけでもない。玉座の天皇を否定したとて日本がなくなるわけではないが、玉座の天皇だけが天皇というわけでもない。半島は、死んだ母神、イザナミを求めて、都を追われたスサノオが流離う場所でもある。高天原の神を否定したとて、葦原中津国の中々まで一掃できるわけでもなかった。
- 夜見国の入り口のひとつである熊野灘の向こうにアメリカを想像しながら、ふと、こんな問い合わせが脳裏に浮かぶ——日本の一番深い場所に存在しているのは、天皇の歴史なのか、それとも民衆の歴史なのか。二つの選択肢は、試みに答えようとする者をためらわせるほど、意外によく似た表情をしている。
- 半島は、国民国家の臨界にあって、旅人をそんな不思議な問い合わせに誘う場所。